投稿論文

若年日系ブラジル人の包摂と排除のプロセス
――準集住地域の調査から

能勢 桂介　立命館大学客員研究員

キーワード：高校進学率，リーマンショック，排除

本稿ではホスト社会への統合という観点から日系ブラジル人の若者の進路に焦点を当てたい。この領域は移民政策において極めて重要であるにもかかわらず，いまだ十分ではない分野だからである。リーマンショック以前，日系ブラジル人は移民のなかでもとりわけ高校進学率が低かったが，リーマンショック後に高校進学率が改善される傾向が見出される。なぜ進学率は改善されたのか，また非高校進学者のその後の状況はどうなっているのか。この問いに答えるためにマジョリティである日本人の若者研究と移民研究を接合し，長野県の準集住地域で 20 名のライフヒストリー・インタビューの分析をおこなった。

リーマンショック後でも，学校の支援，親の就労，移民政策など，彼らを取り巻くホスト社会は抜本的に改善されたとは言い難い。進学率が改善されたのは，滞在の長期化によって彼らの日本社会への適応が進展したこととリーマンショックで高校を卒業しなければ日本で生きていけないという教訓を学んだことが大きい。つまり，進学率の改善は地域の努力もあるが，ブラジル人の意識変容によるところが大きいのである。

しかしながら，高校進学以上の進学には経済的なハンディが付きまとう。また非高校進学者は自身の下層性を意識しながらもそこから抜け出せない状況にあり，ホスト社会から排除されていた。

1　はじめに

これまでニューカマーの教育研究と青年から大人への移行研究が別々におこなわれてきたが，近年ようやく，この二つの分野を接合する研究が出始めている。この接合には移民のトランスナショナルな進路形成を実証していく方向性もある（児島，2010b；志水・山本・鍛冶ほか，2013 など）が，本稿ではホスト社会への統合という観点から移民[*1]を把握することに焦点を当てたい。なぜならば，トランスナショナルな社会関係から大きな影響を受けつつもホスト社会に生活の基盤を置く（置かざるを得ない）移民が存在し，その行く末を見届けることは移民にとってもホスト社会にとっても極めて重要だからである。移民の教育は移民政策の「リトマス試験紙」（Pennix & Martineillo, 2004：145）といわれ，移民政策の成否を判断するのに重要な指標となる。日本における外国人の若者の高校在籍率は，2000 年の国勢調査で中国 75%，フィリピン 40 ～ 45%，ブラジル 30 ～ 35%（鍛冶，2011）と日本人に比べ著しく低く，早い段階で教育過程から脱落し，不安定就労層になっていく若者たちが存在する。こうした教育からの脱落・排除過程は中国料理人の子弟に関して趙（2011），日系ブラジル人に関して児島（2008；2010a），能勢（2012），フィリピン・中国などのステップファミリーに関して能勢（2013）によって調査・分析されてきた。他方，厳しい現実にもかかわらず高校進学さらに大学進学や正規就労を果たす若者も存在し，研究もされるようになった（広崎，2007；志水編，2008；趙，2011 など）が日系ブラジル人の研究は多くはない[*2]。

そこで本稿では，日系ブラジル人の若者の包摂と排除プロセスをライフヒストリー調査から分析する。この調査は準集住地域でおこなわれた。外国人の調査は集住地域に偏っているが全国的には非集住地域の方が大多数であり，そうした地域で起っていることを明らかにすることも本稿の目的である。

表 1　排除／包摂類型

	出自言語文化の継承・承認	出自言語文化の非継承・非承認
資源多	バイカルチュラル	同化
資源少	セグリゲーション	排除・貧困

2　分析枠組みと調査概要

(1)　移民研究と若者の社会的排除研究の接合

最初に，排除／包摂を定義し，本稿の分析枠組みを提示しておこう。排除／包摂は，雇用・福祉といった資源分配の多寡と出自の言語文化の承認・否認という 2 基準 4 類型が設定できる（表 1）[*3]。日本では，高卒や大卒であれば正規雇用に就きやすいので包摂の可能性が高くなるが，中卒以下の学歴では非正規雇用でしか就労できず排除・貧困に陥りやすいといえる[*4]。

排除／包摂の要因を分析するためには，若者（およびその家族）の資本（学歴，経済など）／戦略とホスト社会の構造（移民政策，労働，教育・社会保障，ソーシャル・キャピタルと差別，イデオロギー）の相互作用によって引き起こされる排除／包摂過程を検討していく必要がある。

日本における若者の社会的排除のマクロ的要因は，過去 20 年間，他の先進社会と同様に構造変動による長期不況や非正規労働者の増大などがあったにもかかわらず，男性正社員／女性主婦という家族をモデルとした「日本型社会保障」が維持されてきたことにある（宮本，2009）。そのため出身家族のありかたが若者たちを左右してしまう。若者の排除研究において，子どもが中卒・高校中退に陥りやすいのは，経済的困難や離婚・再婚の家庭（あるいは双方の重複）が多いことが明らかになっている（部落解放・人権研究所編，2005 など）。この観点から移民の家族を分類すると，リスクが高いグループをある程度，推測できる。本稿では，移民の家族を①IT技術者など階層的に高く人的資本も豊富であるとみなせる高度人材の家族，②請負・派遣を典型とする非正規雇用で就労することが多い南米日系人や中国帰国者の両親とも移民の家族，③日本人夫アジア系妻の家族に分類する。このなかで②，③は外国出身ということだけでなく経済状況や家族構成の観点から排除リスクが高いと考えられる。他方，移民の教育研究では子どもの排除リスクとして移住経緯，ホスト国への定住意志の有無，出身国の影響，来日時期，日本語力，制度的・文化的な差別・周縁化などが挙げられている（佐久間，2006；清水 2006 など）。

こうして見てくると，移民の若者が高校，大学を経て正規就労に達するには，どの家族にも共通す

るリスクと移民特有のリスクが重層的・複合的にからみあって形成されるリスク，ハンディをいくつも回避し，突破しなければならないことが予想できる。

⑵ 調査・調査地の概要

本稿は2009年３月～2009年12月と2012年10月～2013年７月に，15歳～34歳までの1.5世の若者（実の両親，子どもが外国生まれで，子どもがおおよそ15歳までに現居住国に移住）と２世（両親は外国生まれ，子どもは現居住国生まれ）の若者たち[*5]にライフヒストリー・インタビューをおこなった調査をもとに，分析する[*6]。使用言語は日本語でおこなったので日本語会話が不得手な者は除外されているが，そうした若者の多くは新規来日層でリーマンショック後帰国した。またインタビューを補い，分析を深めるために筆者による子ども・若者，学校・教育委員会，ブラジル人，ブラジル人学校[*7]，企業，ボランティアに対するインタビューや参与観察によるデータ（能勢，2012），先の移民家族③のステップファミリーやマジョリティである日本人の若者研究を適宜比較参照する[*8]。

調査地の長野県Ｘ地域は，リーマンショック前の2005年で総人口約43万人，外国人数は１万人弱だった。主要なＡ市，Ｂ市，Ｃ市では外国人比率が各市２％台に達し，ブラジル人数も各市1,000人を超えていた。Ｘ地域は外国人集住都市会議の参加都市ほどではないが，それに準ずる地域であった。こうした地域が形成されたのは長野県全体と同様，いずれの市も電気機械や精密機械などの製造業の割合が高かったからで，そこにブラジル人の９割が就労していた。また教会や商店はあったが集住地域のようなブラジル人独自の互助組織は存在せず，社会関係資本は脆弱だった。

長野県はリーマンショックの影響が非常に大きかった。長野県はブラジル人の減少率が2007年と2012年との比較で60.1％減と全国平均の40.6％減より著しく大きかったが，Ａ市やＣ市もこれと同様の減少率を示している（Ａ市：52.1％減，Ｃ市：66.2％減）[*9]。これは２市が外需依存度の高い精密機械の割合が高かったためだと思われる。内需依存度が高い食品工業があるＢ市は，同じ期間の比較で43.4％減と全国とほぼ同様の減少率だった。

ホスト地域に関していうと，リーマンショック前に長野県は群馬県とほぼ同レヴェルのブラジル人数（2007年で群馬県：17,158人，長野県：15,783人）であったにもかかわらず，ブラジル人が各所に分散していたため彼らが抱える問題が地域で顕在化しにくかった。それでも2000年代に入ると，長野県内２都市が外国人集住都市会議に参加し，県でも田中康夫知事時代には多文化共生政策が進捗した（だが知事の交替とともに後退）。Ｘ地域ではＡ市とＣ市が90年代後半に外国人相談員，Ｃ市が長野県内で先駆的に教育政策（拠点校で希望者に日本語教育）を導入したが，Ｂ市はほぼ皆無だった。国の政策が不在で財政状況が厳しいなか各教育行政は，外国人の問題を知りつつも政策化出来なかったり（Ｂ市），たとえ政策化されても教育長の交替によって政策が停滞した（Ｃ市）。しかし，近年Ｂ市は，市民の働きかけによって2009年，学校に日本語支援員の配置（支援員約15名，30～40名の支援），2012年，相談・交流センターを設置し，急速に政策が進んだ。

被調査者の概要を見てみよう（表２）。先行研究（児島，2008；児島，2010a；鍛冶，2011）や筆者調査を整理分類してみると，日本に生まれるか幼少期に来日し[*10]，一地域に定住する者（タイプＡ）は高校進学率が高いが，日－伯，日本国内問わず頻繁に移動する者（タイプＢ）や高校受験数年前の思春期に来た者（タイプＣ）は高校進学率が極めて低くなる。本調査では，タイプＡは９人中８人，タイプＢは４人中１人，タイプＣは４人中２人（１名はブラジルの高校）が高校に進学しているが，タイプＡとそれ以外のタイプの高校進学格差は歴然としている。これはステップファミリーの若者が思春期来日

表２　ブラジル人データ

ID	生年（年齢）	来日から現在まで	情報経路
Ａ１男	1985年生（24歳；28歳*）	1990年(4歳)に来日。日本の高校大学を経て自動車営業。日本人妻と結婚。その後外資系企業に転職。	○
Ａ２女（Ｃ３妹）	1986年生（23歳）	1993年（6歳）で来日。日本の小中高を経て専門学校卒業。東京で事務職に就く。	C3
Ａ３女	1989年生（21歳）	1990年（1歳）に来日。高校卒業後，リーマンショック。帰国するが，適応できず再来日。専門学校進学を目指す（2012年10月）。	○
Ａ４女	1991年生（17歳）	8歳で来日以降，小中高と日本。リーマンショックで両親の雇用危機。その後，愛知の短大に進学。	A3 日教
Ａ５男：ルイ	1994生（19歳*）	日本生まれ。工業高校に進学し，2013年に製造業に就職。	○ ◎母親
Ａ６男：サヤマ	1992年生（16歳；20歳*）	日本生まれ。祖母と同居の母子家庭。定時制高校卒後，短大に。現在4年生大学に編入。	○
Ａ７女	1993年生（19歳*）	日本生まれ。普通科高校進学，中退。現在，アルバイト。	◎母親
Ａ８女（Ｂ４妹）	1992年生（21歳*）	幼少期の来日のため転校の影響が少なく高校進学。現在看護師。	○
Ａ９女	1994年生（19歳*）	高校卒業後，家族とともに帰国予定のため現在，アルバイト。	◎叔母
Ｂ１妻：エリス	1982年生（27歳；31歳*）	1991年（10歳）で来日。3年後，帰国。その後，1995年（14歳）で家族と就労目的で再来日。1998年（16歳）にD1夫と知り合い結婚し，4人の子どもをもうける。以後はD1を参照せよ。	○ 本人
Ｂ２男	1994年生（15歳）	2001年（7歳）で来日。父子家庭。父はヘルニアで酒癖悪く，鉄くずを拾う仕事をし，貧困状態。長野県内を2校転校，いじめにもあう。中学校は休みがちだったが，教員の勧めで定時制に高校進学。しかし，入学後も怠学傾向は続き，素行も悪く中退。	○ 高校教員等
Ｂ３男	1992年生（17歳）	小2まで日本。その後，ブラジルに一時帰国し，小4で再来日。読み書きは平仮名程度。中学卒業後，ハケン会社勤務。	級友
Ｂ４男：トミタ	1988生（25歳*）	1997年（9歳）で来日，学校を転々としている間に学習意欲を喪失。中学卒業と同時にハケン就労。	○
Ｃ１妻：パウラ	1980年生（29歳）	1995(14歳)に来日，中学に編入。中学校卒業後，長野県各地でハケン就労，2001年（21歳）に結婚。ハケン就労しながら子育て。	○
Ｃ２妻：マリーザ	1978年生（31歳；35歳*）	1993年（14歳）に来日，中学に編入。中学卒業後，ブラジルに単身帰国し，高校卒業。1997年，再来日し，アジア系の実習生と結婚。2013年3月，夫と子どもとともにブラジルに帰国。	○
Ｃ３男	1979年生（30歳）	ブラジルの中学卒業後，1993年（14歳）で来日。高校には進学せずハケン会社（3，4社）に就労。現在，両親とブラジル商店経営。	○ ◎母親
Ｃ４男	1996生（17歳*）	2010年(13歳)で来日，中学編入。高校進学。3年前から生活保護受給家庭。その後，製造業就職。	○
Ｄ１夫：ミルトン	1976年（33歳；37歳）	高校中退し，1991年（当時15歳）に父親と就労目的で来日。1998年，B1妻と知り合い結婚（当時22歳）。その後，ハケン会社で妻とともに日本各地で就労。リーマンショック時に失業し，生活保護受給。その後，生活保護を脱した（2012年5月）。	○
Ｄ２夫	1978年生（35歳*）	中学を卒業後，日本に。ブラジルに帰国して学歴取得も考えたが，そのまま日本に定着。	○
Ｄ３男	1990年生	ブラジルの中学卒業後，日本に家族来日。高校希望するが断念し，親と同じハケン会社で就労。	日教等

注）年齢は，インタビュー実施時点での年齢で，無印は2009年，*は2013年時点におこなわれたことを示す。本人へのインタビューは「○」，母親などの関係者へのインタビューは「◎母親」などと記す。その他の「Ａ３」，「日教」（日本語教室）などの記載は，インフォーマル・インタビューや参与観察などで得られた情報の経路。

であっても高校進学する（能勢，2013）のと著しい対照をなしている。また兄弟でも来日タイミングによってタイプが分かれ，それが高校進学の差となっている（Ａ８妹とＢ４兄，Ａ２妹とＣ３兄）。さらに若者問題として看過できないので，日本の学校に通ったことがないブラジルでの学歴が高卒未満の若者もタイプＤとして設定する。

３　若者は語る：７人のライフヒストリー

⑴　来日経緯と家族

７人の来日経緯と家族状況はどのようなものだろうか。タイプ別に記述する。ルイ（Ａ５）は，母（1968年生。働きながら高校を卒業）が兄とともに1990年に来日（22歳）。現在の夫と知り合って結婚し，ルイが生まれた。４歳の時にＸ地域に引越し，それ以来，一度も転校することなく同じ学区の小中学校に通った。またルイには１歳下の妹がいる。

サヤマ（Ａ６）は，父（中学中退）は1990年，16歳の時に叔父のつてをたよって，母（高卒）は銀行員をやめ，それぞれ来日。１年後，両親が出会い結婚，Ｘ地域に移住しサヤマが生まれた。５歳の時に両親が離婚し，母方の祖母（専門学校卒）と妹11歳，母親とそのボーイフレンドの子どもと祖母で暮らしている（ただしボーイフレンドとは同居せず）。２歳の時に半年間，ブラジルにいただけで，その後は同じ学校区の小中学校に通った。

エリス（Ｂ１）は，彼女が幼いときに父（貧しかったので若い時から就労）は日系の会社に勤め，ローンで家，車を買えるほどであった。しかし，会社をやめると彼女の父は，家族を支えるために写真屋，タクシー運転手，野菜売りなど様々な仕事をしていた。この状況を打開するために彼女の父は単身で1988年に来日。その後，1991年，千葉県に家族で移住した。10歳だったエリスは「日本に行く時，遊びに行くものだと思っていた」という。トミタ（Ｂ４）は父（大学中退）が先に来日し，1996年に母（学歴不明，前職看護師手伝い），４歳下の妹（Ａ８）とともに９歳で来日（広島）した。

パウラ（Ｃ１，母・ドイツ系と先住民のミックス）が来日したのは，持ち家もあったが長男が「日本に行ってみたい。お金も儲かる」と父（大卒）を誘ったのがきっかけである。長男（20歳），次男（16歳）も含めた家族全員で1995年に来日し，パウラはＸ地域Ｃ市の中学に編入学した（14歳）。マリーザ（Ｃ２，父・イタリア系）は両親が経営していた服飾の会社が倒産し，叔父に誘われ，両親と２人の姉妹とともに1993年に来日（愛知県豊橋市）。

エリスと結婚しているミルトン（Ｄ１）についても触れておこう。ミルトン（母・イタリア系）は，リオデジャネイロの貧民地域（ファベーラ）に生まれる。勉強は好きで良い成績をとれば祖母は褒美をくれた。しかし，父が稼いだ金を酒につぎ込み，文房具も買えないのを友だちにバカにされたりして，高校を中退。1991年，15歳で父と来日した。

学歴や階層は様々だが，親たちはブラジルの経済危機の影響によって90年代前半から中頃に来日し，若者たちも親と同行，または日本で生まれている。移住先の日本で親たちは例外なく製造業ハケン[*11]で就労している。なお名前はすべて仮名である。

⑵　学校

子どもたちにとって最初のホスト社会である学校はどのようなものだったのだろうか。タイプＣのパウラ，マリーザは年齢が14歳と日本の高校進学において非常に大事な時期に来日している。マリーザは日本の学校に対する違和感（一日中学校にいること，指輪・ピアスの禁止など）やブラジル人からのいじめによって学校が嫌いになり，週に１，２回学校に通う以外は団地で友達と遊んでいた[*12]。母も仕事で忙しく，誰にも相談が出来なかった。それに対して，パウラは「あの頃学校にブラジル人は少なく，クラスの人も仲良くしてくれた。楽しかった」と対照的な感想を述べている。２人の適応状況は違うが，国語が全く理解できずに授業中に別の本を読んでいたり（パウラ），授業に出ないで保健室にブラジル人たちと一日中いたり（マリーザ）して，学習言語としての日本語が身につかなかったことは共通している。

このような状況で２人とも教員や親に高校進学を勧められたが，パウラはハケン会社を探して働き始め，マリーザは中学卒業後，１人でブラジルに帰り，親せきの家で中学校をやり直し，高校に通いながら塾（週２回）で日本語を勉強した。その後，マリーザは大学で文学や美術の勉強をすることを希望したが，父（現在，死去）が病気になり，日本で稼いだお金を治療費に使わざるをえなかったので，大学進学をあきらめ，再び日本に戻った。

タイプＢはどうだろう。バブル期で父の給料も良かったエリスの初回来日時の学校の思い出はかなりよいものだ。最初はうまく言葉が喋れず，ミスを自分のせいにされたこともあったが，言葉を自然に覚え，仲の良い友だちができ，ディズニーランドに行ったり，カレーを一緒に作ったりした。先生よりも友だちに助けてもらうことが多かった。帰国前にクラメイトが書いてくれた作文を，帰国後にブラジルの祖母と２人で読んで感涙した。今でもクラスメイトとは連絡を取っている。ブラジルに帰ると１年間補習校に通い，１年遅れで中学校に入学した。勉強は好きではなかったが，日本で算数が出来るようになったのでブラジルでも学習についていけた。学校での経験を「ブラジルに帰った時はポルトガル語に慣れるのに苦労した。でも日本の学校もブラジルの学校も全部，楽しかった」とエリスは振り返る。エリスは帰国／再来日がなかったら，おそらくブラジルか日本で高校進学が可能だったと思われる（現在では住所を書ける程度の日本語力）。しかし，14歳の時に両親が山形県に仕事を見つけたので，ブラジルの中学を途中でやめ，再来日した。親に「仕事しろ」といわれ，家族とともに働き始めたが，年齢のことについて会社は何もいわなかった。

トミタは９歳という幼少期に来日したにもかかわらず，度重なる引越しと日本語支援の欠如によって学習意欲を喪失していった。来日後，半年ほど広島の小学校に通ってからＸ地域Ｃ市のＮ小に２年間通った。そこでは日本語教室や障害者クラスに入れられただけで日本語は教えられなかった。またいじめもあり，父が学校に掛け合ったこともあった。それからまた５年生の時にＮ小に隣接するＫ小に引っ越したが，その時やっと日本語教室の先生が日本語の基礎を熱心に教えてくれた。おかげでＫ小から普通学級に出るようになり，日本人の友達も出来た。それでも勉強面ではきつく，国語や算数の授業は受けなかった。また学級の先生の対応も様々で，学習意欲を挫くような対応もあった（その場で教えられることでも日本語教室に行くように指示されるなど）。

中学最初の半年は小学校と同じ地区の学校に通っていたが，授業の内容が難しくてついていけず，日本語教室にいた。その後，隣町に引っ越して，そこの中学校に通ったが，特別教室に行かされ「しょうがない」という投げやりの気持ちだったし，テストも「受けろ」とはいわれなかった。家では親が残業の時は，家事をやって妹と２人で両親を待っていた。しかし，勉強が教えられない両親に「学校に行け」といわれても「説得力がなかった」とトミタはいう。こうしたことが重なり，中学２年生の時にブラジル人学校に移った。小学校からやり直してポルトガル語の読み書きや歴史，数学といった教科は分かるようになったが，先生のレヴェルは低いと感じた。中学３年生の３学期に中学校から

「今から出席すれば卒業させる」というので，卒業だけはした。しかし，日本の高校は全く考えられず，ブラジル人学校の友達の紹介でハケン会社に入った。

高校に進学したタイプＡの子どもたちの学校体験はどうだったのだろう。サヤマは祖母が同居する母子家庭に育った。ハケン会社に勤務する母が稼ぎ（月収25万円，夜勤あり），祖母が子どもの世話をした。日本語の方が得意な祖母からは勉強をやるようにいわれ，母からはポルトガル語を教わった。小学校１，２年の時にミドルネームのことでからかわれることがあったが，跳ね返した。中学の時は実父に誘われ，弁当屋の手伝いやパーティーに出席することがあった。そのため彼はハケン会社や在日ブラジル人社会の実態（解雇トラブルなど）を驚くほどよく知っている。

彼は母を楽にするために就職することを希望したが，母や学校の先生から猛反対された。しかし，母親は日本語が読めないので日本の事情が分からず，ブラジルの中学を中退した父親は「学校は行かなくてもよい」という考えで，進路に関して両親は金銭や情報で全くあてにならなかった。そこで中学２年生の時，自主的に受験情報を取集し，家庭事情を考慮して定時制高校を選択した。転校しなかったのは，家族が県営住宅に落ち着いたからで偶然だった。

ルイは幼いころに買い物など外で親がポルトガル語を話すことが恥ずかしかった以外は，家ではポルトガル語，学校では日本語という環境を強く意識したことがなかった。また多くの外国人が経験するイジメも経験したことはなかった。中学の時は当たり前のように高校に行こうと思っていたが，あまり勉強が好きではなく，塾には親の金銭事情もあって受験直前まで行かなかった。受験期には，リーマンショックの煽りを受け失業し，三重県に出稼ぎをしていた父はブラジルに帰ることを主張する一方，子どもが日本でここまで成長したからと母は日本に留まることを主張し，大喧嘩になった。結局，母が押切ってルイは進学塾に通い，工業高校に進学した。ルイは「あの時は両親が離婚して僕がブラジル，妹が日本に残るのかと思い，泣いた」とふり返る。また彼にとってブラジルは「帰るというよりは行く」という感覚で，ポルトガル語も複雑な話は出来ないという。

だがルイの親族で高校に進学したのはルイのほかにもう１人いるだけで，その他はブラジルに帰ったり，製造業で働いていたりしているという。ルイに日系ブラジル人が日本にいる理由を聞いても曖昧で正確に自己の状況を認識しているとはいえないが，父の失業や親族の状況を見聞きして皮膚感覚で自分の不利さを自覚しているといえる。母親にも話を聞いたが，子どもの教育のことを考慮して，転校しないように意識的に一地域に定住していたとのことだった。

⑶ 就労／進学

彼らは，学校を出てからどのような就労や生活を送ったのだろうか。パウラは中学卒業後，県内でハケン会社を５社変えたところで，21歳で結婚。その後も４社変えている（現在１児の母）。彼女はトラブルを避けるために情報収集をおこない，ハケン会社を選んでいるという。インタビュー当時リーマンショックでパウラの夫は失業していたが，彼女に仕事があり，また同じ団地に両親がいるのでなんとか生活を維持していた。

マリーザは一貫して進学意欲があったが，状況に流されてままならない日々を送る。ブラジルの高校を卒業後，長野オリンピックの1998年，母を追って再び来日（長野県）。日本語学校に入ろうとしたが，学費が高く断念せざるを得なかった。転機はアジア系の実習生と付き合い始めたことで，２人で日本語検定を受けた（ただし会場にブラジル人は皆無）。2002年，彼が出身国に帰るときに結婚（24歳）し，夫は働いている会社社長に認められ，正社員になった。そこで日本語習得に磨きをかけながら，夫の会社の資格や自動車免許の取得，ビザの更新を夫婦で協力しておこなっていった（日本語検定１級取得）。また子育てには日本の育児雑誌も参考にしたという。

エリスは就労後２年ほどして，夫のミルトン（Ｄ１）と出会い，16歳で結婚。10年で４人の子どもをもうけ，今は働きたくても働けない状態である。ミルトンは日本に来てまもなく，理不尽なことをいってくる父と喧嘩し，家を出た。日本の不良とつるんだりしながら，各地を転々とした後，Ｘ地域でエリスと出会った。その後２人はミルトンが一家を支え，１社当たり２ヶ月～１年の勤務期間，勤務場所は長野県Ｘ地域で６社，長野県内他地域，岩手，宮城，山梨，名古屋など10年間で約11社もハケン会社を変えている。この中には３交代制で16時間という長時間労働や危険な労働，詐欺も含まれている[*13]。こうしてミルトンはリーマンショックを迎えた。2008年10月，雇用保険が未加入なままハケン会社に解雇され，翌年２月には第４子が誕生して生活が困窮。カトリック教会の援助を得ながら食いつなぎ，何度も生活保護申請に行ったが相手にされず，筆者らの支援を受けようやく受給した。彼は人生を振り返って，こうなったのは親のせいで，「あのまま高校にいれば弁護士や警察官になった」と後悔を口にした。

トミタも思春期来日の若者たちと同じように転職を繰り返さざるを得なかった。カメラや携帯部品など製造業での転職を５回繰り返した後，めっき塗装の仕事が６年間続いた。「このままでもいいか」と思っていた矢先に仕事がなくなり，2010年から失業を長期間余儀なくされた。長野県外にも仕事を探したがなかなか見つからず，彼は学歴がないことを後悔し始めた。腕に自信がある仕事でも理由が不明なまま落とされ，「学歴だからか外国人だからか差別があると感じる」という。

サヤマは，高校入学後，就職を考えていた。というのも当時リーマンショックで母や母のボーイフレンドが失業し，サヤマが一家を支えていたからだ。しかし，高校２年生のとき担任に進学を勧められ，奨学金を得て短大に進学。一方，母や妹は2011年にブラジル人に帰った。とくに妹は大変成績が良く，地域トップ校への進学を望んでいたが，やむをえない選択だった。その後，サヤマ自身は短大で成績が良く，教員を目指して４年生大学に編入学した。またサヤマはポルトガル語も継承し，在日ブラジル人の社会も知っているので日本人について「何のために生きているのか？　楽しそうじゃない」と語り，日本人や日本社会を突き放して見ることも出来る。

ルイは「中途半端な進学だったら就職しろ」と面倒見のよい担任（ルイのクラスでは中退者がなかった）にアドバイスされたのと妹が大学進学を希望しているのでそのことも考えて就職を決めた。就職活動期は先生の勧めた３社のうち１社を受け，合格した。面接では，ブラジルについても聞かれたが，それよりもやめないで続けられるか聞かれた。「ホント，信じられないぐらい。子どもの頃夢で見た気がする」とルイはいう。

⑷ 将来展望

将来展望についても聞いた。ルイは，入社１年目で「今はこの会社で技術を身に着けたい」と前向きであり，サヤマは教員というライフコースが射程に入っているといってよい。

パウラは，先のインタビューでも分かるように，ハケンの不安定さを身をもって知っており，結婚をしたとき「正社員になれないかな」という話を夫としたことがあった。同じ職場の日本人社員に手取り給料が自分たちと同水準であると聞いたし，現在はハケンでも社会保険に入っているので，彼女は「今のままでいい」という。子どもの教育については，「小さい時からいるし，学校を私たちのようにやめる必要がない。高校，大学まで全部出したい」と展望を語った。しかし，正社員に対する認識

は，マリーザは大分違う。夫が正社員になって何の保証もなく誤魔化されやすいハケン社員とは異なり，正社員には職場手当や年金があることが分かったからだ。「社会保険は払わない方がいい」という日本語が出来ない姉たちと違って，彼女は社会保険を払った方が安心だと考えている。

ミルトン（とエリス）は，日本にいたいという意志がはっきりしている。その理由は「うちにはおもちゃ，冷蔵庫にはジュース。こっちのほうがいい暮らしだ。向こうでは車なんか買えない」というように，日本で得た豊かな生活である。しかし，生活保護申請するほど困窮しているという状況下，仕事もなく将来展望を具体的に描ける状況にはない。トミタは，将来，ブラジル料理店を開きたいと考えているが，実際には開業の目途は立っていない。

4　考察

ここではトランスナショナルなステップファミリーの若者，日本の若者と比較しつつ，ブラジル人特有の困難を高校進学者，高校非進学者に分けてインタビュー・データを考察していきたい。

⑴　高校進学と高校非進学を分かつもの

まず，日系ブラジル人の若者が高校進学しない要因を考えてみよう。第１に，思春期来日の若者たちは，ブラジルの経済危機によって困難になった生活を打開しようとする親とともに来日し，暫定的に日本の中学校に編入していた。家族の展望が見えない状況では，パウラ，マリーザも定住の覚悟が出来るはずもないので，中途半端な学校適応になっていた。トランスナショナルなステップファミリーも母親が生活を切り開くために日本で再婚する。しかし，この場合は母子ともに定住の覚悟があり，高校進学していた（能勢，2013）。このように思春期来日では，移住初期の定住志向の有無が高校進学に決定的な影響を及ぼす。

第２に，子どもが幼少期に来日しても，日本国内，日－伯の頻繁な移動は学校適応や学歴取得に致命的な影響を与えていた。転校は子どもの学校適応を困難にすると指摘される（Singh S. P. et al., 2014）が，日系ブラジル人の場合，それがトランスナショナルにおこなわれる。エリスは，来日→帰国→再来日といった家族が頻繁に移動せざるを得ない状況において，親に「働け」といわれ，学歴取得が放棄されていた。日本に定住してもトミタのように親がハケンという不安定な就労なので，親が転職するたびに学校を変わらざるを得ず，次第に学習や友人関係になじめなくなり，中卒に留まってしまう。Ｂ２，Ｂ３もこうしたケースである。このような転校リスクを親が配慮して一地域に定住している場合がある。ルイやＡ７の母親がそうで，この戦略によって子どもたちは高校に進学した。

第３に，ブラジル人家庭には日本での進学を適切にガイドする者がいない。上手くいったステップファミリーは義父が子どもの高校進学を当然視しているので，進路情報，日本語支援，塾の情報をもたらすガイドになる。しかし，移民だけで構成される家族には的確にそれを出来る人がない。移民だけの家族は，日本人の中流家庭が当然のごとくおこなっている進学サポートという「シャドウ・ワーク」（Illich, 1981=1990）を一つひとつ学び，実践していかなければならない。たとえば，ルイの母親は，ルイが高校受験を控えた中学校３年生の秋に，息子が日本で生きていくために高校進学は必要か否か，またそのために塾は必要か否かを筆者に相談してきた。彼女はハケンで就労する多くのブラジル人とは異なり，行政機関の相談職で日本人と一緒に働いてきたが，こうした人でさえ受験期まで日本の進学システムを理解出来ていなかったのである。15 年以上日本に住んでいる人でさえこうなのだから来日直後や移動が頻繁な家族の無知さは推測でき，このことが進学に不利に作用する。

第４に，学校のサポートのなさがある。マリーザは何も教えられないまま保健室に放置されていたし，パウラにも特別な支援はなかった。同様なことはＡ１やブラジル人の学校ボランティアも報告している（能勢，2012）。また各教育委員会が「ブラジル人は移動が頻繁で対処不可能」と匙を投げたり（能勢，2012），教員自身が差別を実践している場合もある（児島，2008；能勢，2012）。トミタは移動が頻繁で継続した支援を受けることが出来なかったし，この時期Ｃ市は希望者を集めて拠点校で日本語教室を展開していたはずだが，トミタは通っていない。またマリーザは豊橋市，ミルトンは愛知県と集住地域に 90 年代半ばに一時期住んでいたが，政策先進地域でも日系ブラジル人の若者たちに十分に対応出来なかったことが分かる。

以上のような家族や学校の状況が彼ら彼女らの将来展望を不透明にし，意欲を奪い，マリーザのような不登校状態，パウラのようなお客様状態，トミタのような不適応状態を生んでいく。そのため，ハケン就労している兄弟や知人・友人がロールモデルとして機能し，高校が進路の選択肢から消えるのである。パウラやトミタは友達の紹介や雑誌などでハケンに就労先を見つけていた。加えて当時は，家を出たミルトンの例に見られるように十分自活が可能なほど稼げたし，ブラジルでは購入不可能な自動車やステレオなども手に入れることができた（ブラジル人学校校長，2008 年 11 月 10 日）。リーマンショックまでは学歴がない彼らにもハケンは稼げる場でありえたのである。それで若者たちにはハケン就労という進路がそれほど悪くないと思えたに違いない。こうした状況において，たとえ親や教師が進学を勧めても子どもたちは展望が見えず，自身の学力のなさからあきらめてしまう。多くのブラジル人の子どもは日本の子どもなら家族，学校，友人によって体感的に形成される高校進学に対する動機づけが欠如しているので，容易にハケン就労に至ってしまう。

幼少期から一地域に定住する者は高校進学する者が多い。その理由は，日本滞在が長期化するにしたがって，子どもは日本語や日本社会の方が自然になってくるし，親も日本でのキャリア形成を真剣に考えるようになるからだ。とはいえ，家族の経済状況や帰国／残留の迷いなどハンディがついて回る。ルイは父親の失業をきっかけに家庭内で帰国か残留かの議論が巻き起こり，帰国や高校進学しない可能性もあった。こうした状況は母子家庭のサヤマも同様だった。

⑵　リーマンショックがもたらした階層意識・進路の転換

ともあれ，多くのブラジルの若者は高校進学機会を逸していた。そして，若者たちは中学卒業の資格もあるかないか程度で，親と同じようにハケン会社に就労していく。日本語は話せても読み書きが出来ない彼らからすれば，ブラジル人向けハケンで働くことは手っ取り早い就労先であり，事実上それしかないといえる。もし彼らがブラジル人ハケンという就労先を離れて，日本人が大量に非正規雇用されている飲食業，コンビニなどに職を求めれば，能勢（2013）で取り上げたフィリピンの中卒者たちのように，たちまち日本語能力と差別の厳しい壁にぶつかるだろう。

彼らの不安定就労性は明らかだが，リーマンショックまでは学歴がなくても十分自活していける仕事があり，消費生活を享受していた。また日本の低学歴者と同様，総じて結婚年齢が早い[*14]。もちろん彼らもハケン就労の危険性・不安定性は十分身に染みて知っており，その対応もしている。パウラは他の日本人社員と自分の待遇を比較して，自分の就労のありようを検討しているが，「今のままでいい」という結論を導いていた。同様にマリーザの姉たちは「社会保険は払わないほうがいい」といっていた。しかし，それは正社員の福利厚生や安定度を正確に理解しているというよりは部分的な理解

にとどまり，自身がハケンにとどまる理由づけになっていた[*15]。何よりハケン労働でもリーマンショック前までは曲がりなりにも生活は回り，生活基盤の不確かさを自覚せずに済んでいた。「〔子どもは〕高校，大学まで出したい」（パウラ），「このままでもいいか」（トミタ）というように後悔がないわけではないが，彼らは現状を受け入れていた。そのため，やり直しや脱出という発想や機会は早婚傾向もあって極めて少ない。本調査ではマリーザが唯一ブラジルに単身帰国し，高校の学歴を取得していた。

高校非進学者の不安定就労，早婚，時間展望なきコンサマトリーな消費生活は階層的に下層の特徴を示していた（苅谷，2001；津谷，2006）。しかし，生活が何とか回っているのと在日ブラジル人社会が「セグリゲーション」の状態にあったため「排除・貧困」リスクを自覚にしにくかった。彼らは帰るという選択肢もあるという意識と不安定でありつつも何とか今は生活が回っているという二重の「モラトリアム状態」にあったといってよい。だが日本人フリーターと同じで，日本でもブラジルでも安定した職への転職チャンスはハケン就労の長期化にともない確実に失われていく。

しかし，こうしたモラトリアム状態は，リーマンショックとその余波がもたらした長期失業と窮乏によって一瞬のうちに崩壊した。そして，長期失業はミルトンやトミタに強い後悔をひき起こした。リーマンショックは帰国／残留を迫り，帰るものは帰り，ブラジル人数は大幅に減少した。マリーザも子どもが小学校に入学する前に帰国を決意した[*16]。しかし，帰るに帰れない人々がいる。それはミルトンのようにもともとブラジルで貧困だったり，トミタのように日本の生活に慣れすぎている人々である。リーマンショック以降，雇用は一層，短期化し，リーマンショック以前のようには戻らない[*17]。そうした中でトミタは起業を口にするがその目途は全く立っていないし，ミルトンは生活保護を脱したものの不安定な雇用のままだ。包摂／排除の類型では，彼らは雇用や福祉といった生活資源が不十分にしか分配されず，アイデンティティも承認されない「排除・貧困」に当てはまる。このことを以前にも彼らは認識していなかったわけではないが，リーマンショックは，ホスト社会での低い地位と排除をこれ以上ない仕方で彼らに思い知らせたのである。

高校非進学者は親世代と同様，今後，不安定就労から抜け出せる可能性は非常に少ない。結局のところ，パウラ，エリス，トミタは20年に及ぶ日系ブラジル人の中途半端な定住の犠牲者だといえる。Ａ７の親（40代）は「このままいけば生活保護になる」と語ったが，高校進学しなかった若者たちも同様の将来不安を抱える。また早婚のため世代間サイクルが短いのが特徴である。例えばＤ２夫やサヤマの父は20代前半で親となったため，まだ30代半ばと若い。阿部彩は「十五歳時の貧困」→「限られた教育機会」→「恵まれない職」→「低所得」→「低い生活水準」という不平等・貧困の再生産のサイクルを指摘する（阿部，2008：24）が，彼ら彼女らのケースはまさにこのサイクルに当てはまる。

他方でリーマンショック以降，定住を覚悟した日系ブラジル人は高校進学を希望するようになり，高校進学率が上昇している[*18]。ルイやサヤマが高校受験や高校在学した時期はちょうど在日ブラジル人社会の過渡期だった。高卒－就職したルイの例は長期不況にもかかわらず，苅谷（1991）が研究したような製造業と工業高校の太いパイプが健在で，一度このルートにのると外国人であることがハンディになりにくいことが分かる[*19]。

では大学進学者はどうか。親に金がないのでサヤマ，ルイの妹は奨学金を借りて自分で学費や生活費を稼がざるを得ない。トミタの妹（Ａ８）は親が銀行に金を借りて進学したし，ルイが就職したのは大学志望の妹を支えるという意味もあった。さらにはコツコツ貯めた貯金を帰国資金だけを残して子どもの教育にすべて費やしたというＡ１の親のような例もある。この背景にはブラジル人は日本滞在が長期化すると予期しておらず，教育資金を貯めていなかったこと（2013年４月22日，ブラジル人相談員談），またたとえ教育資金の必要性を知っていたとしても不安定な雇用で十分に貯められなかったことがあげられる。このように高校まで進学したとしてもその先の進学は経済的なハンディが付きまとう。

包摂／排除の類型から高卒以上の学歴取得者を見てみると，彼らは両親の階層より上昇している点では共通するが，アイデンティティのあり方は家族状況，現在状況によって多様である。在日ブラジル人についての認識が不確かでポルトガル語が苦手なルイや「恥ずかしい」からという理由で職場ではブラジル人であることを話さないというＡ８は「同化」，ブラジル人と日本人を突き放して見ることが出来るサヤマや親にポルトガル語とブラジル人意識を教えられ，積極的にブラジル人であることを表明するＡ１は「バイカルチュラル」ということになろう。同化傾向の２人はアイデンティティの不確かさや消極性を抱え，それを言語化したり，表明したり出来ずにいる。ここには階層上昇だけでは解決できない問題が潜在している[*20]。

その他には高校を中退し，ひきこもりを経てバイトで暮らしている事例（Ａ７），リーマンショック期に高校を卒業し，ブラジルに帰ったもののその自由さになじめず，再び来日する事例（Ａ３），高校卒業したものの家族で帰国を予定しているのでバイトをしている事例（Ａ11）がある。またこの地域のブラジル人学校の中学を卒業したものの，日本でやっていけないことを認識し，日本の高校進学を模索している者もいるという（Ｃ４）。このようにリーマンショック後の現在でも，日－伯間で中途半端になってしまう若者たちがいる。

５　おわりに

最後に本稿をまとめながら今後の課題について述べたい。高校非進学の若者に関しては，集住地域と同様のことが準集住地域の長野県Ｘ地域にも存在し，就労・生活は厳しい状況にあった[*21]。彼らは，中途半端な定住と移民統合政策の欠如が相互作用して形成された重層的で複合的なハンディのために日本の教育－就労システムにのれなかったのである。

こうした移住状況を一変させたのがリーマンショックであった。日本に幼少期から居住し，高校進学や大学進学にさしかかった家族や若者に帰国か進学かの決断を迫った。トランスナショナルな経済動向が，中途半端な定住を許さない状況を作りだすことによって高校進学率を上昇させたのである。これは彼らが経済的な要因によって左右されやすい存在であることを改めて示すとともに，子どもの教育問題の解決を求めていた自治体，支援者にとってはいささか皮肉な事態でもある。

とはいえ，支援が不要になったわけでは全くない。本調査でＣ４は中学１年の時，定住目的で父親に呼び寄せられ，母と弟とともに来日した。彼は日本語習得や学校適応の問題に加えて家族の問題を抱え，ハンディが山積みだった。だがその頃，タイミングよくＢ市の多文化共生政策が始まり，日本語支援やソーシャルワークの助けを借りながら，高校に進学し，高校卒業後には正社員として就職することもできた。このようにブラジル人が定住化に舵を切った今だからこそ支援の必要性が高まっているし，支援効果が出やすいといえる。

しかし，支援があってもなお，若者が抱える問題の複雑さのために脱落する若者は存在し，彼ら彼女らの問題が地域に密かに蓄積され続けるだろう。こうしたことは集住地域ではなく，地域問題化されにくく，政策化されにくい非集住地域だからこそ顕在化しにくく深刻になっていく可能性が高い。また高卒以上の学歴を取得し，階層上昇を果たしつつある若者もアイデンティティの問題が潜在して

いた。

日系ブラジル人などニューカマーと呼ばれる外国出身者が移住するようになって約25年。格差・貧困化と多文化化が重層・複合して生み出される諸課題を的確に捉え，それに対して何ができるのか，再度，強く問わなければならない。

*1　本稿では，外国出身者で永住・定住を希望または実態化している者を「移民」と定義する。
*2　日系ブラジル人については多くの研究がなされてきているが，子ども・若者の排除という観点ではドキュメンタリー作品の方がその実態を的確に捉えている場合があった（杉山，2008など）。
*3　この包摂／排除類型は（Frazer, 1997=2003）などを参照して作った。詳しくは能勢（2012）を参照せよ。
*4　政府統計によれば20歳～24歳の男性で，大卒：25.1%，専門学校短大卒：33.3%，高卒：43.3%，中卒：60%が非正規雇用となっており，低学歴者ほど非正雇用になる確率が高い（内閣府，2010：28）。
*5　Portes & Rumbaut（2001：23-24）などによる移民の世代の定義，小杉編（2005）によるフリーターの定義を組み合わせた。
*6　一部調査は被調査者が困窮していたため支援者と組んでおこなった。また被調査者の生活相談にも積極的にのった。
*7　X地域にはブラジル人学校はリーマンショック前に３校あり，いずれもバスで１時間半程度かけて生徒を送迎していた。調査していた２校はリーマンショック時に閉校したため，参考程度にしか生徒のその後の状況は分からない。
*8　同じ1.5世でも幼少期来日と思春期来日では言語習得や進路に差がある（広崎，2007；鍛冶，2011）ので，区分して記述分析する。
*9　各自治体や全国データは，各自治体や入国管理局の統計による。
*10　父母の学歴については，分からなかったものは記載していない。また父母の出自に記載がない者は日系人である。
*11　業務請負と人材派遣は法的には異なるが，労働者に聞いてもどちらの形態で働いているか分からないので，本稿では両者を一括して「ハケン」と表記する。
*12　ブラジル人生徒の学習意欲のなさは，Ａ１も証言している。
*13　これ以降，主にミルトンが話した。
*14　早婚傾向については宮島（2013）も指摘している。また初婚年齢は低学歴者ほど早い――特に女性――ということは，日本人の研究でも指摘されている（津谷，2006）。ブラジル人の早婚傾向は学歴・階層とエスニシティが絡んだものと考えられる。
*15　ここにはWillis（1977=1996）が指摘するのと同様のメカニズムがある。また過去には「日本人＝マジョリティ・強者」VS.「外国人＝マイノリティ・弱者」という単純な図式が通用せず，ブラジル人の方が日本人より自己実現度が高いとの指摘もあった（浅野・今井，2003：148）が，これはリーマンショック以前の状況を反映していたといえる。
*16　この決断を促したもう一つの要因は，工場の閉鎖による夫の失業・転職であった（2013年３月）。
*17　以上，ハローワーク相談員（2013年２月８日）
*18　これはハローワーク相談員（2013年２月８日），Ａ７の母（2013年２月８日）など数々のブラジル人インタビューからほぼ確実であるし，国勢調査からも確かめられる（鍛冶，2013：283-234）。
*19　ただし，「中途採用だと就職しにくい」（サヤマ）ということもあるようだ。
*20　これに関しては，在日コリアンの経験と比較対照してみる必要があろう。
*21　しかしながら，地域間の正確な比較は高校進学率について各地域，各年のデータや地域政策効果の検証が不在であるため困難である。

《参考文献》

- 阿部彩，2008『子どもの貧困――日本の不公平を考える』岩波書店
- 浅野慎一・今井博，2003「出稼ぎブラジル人と日本人の労働と文化変容――過疎地における自動車用ワイヤーハーネス製造工場を事例として」『日本労働社会学会年報』14号，127～154頁
- 鍛冶致，2011「外国人の子どもたちの進学問題――貧困の連鎖を断ち切るために」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』現代人文社・大学図書，38～46頁
- 鍛冶致，2013「数字でみる「外国にルーツをもつ子どもたち」」志水 宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致ほか『「往還する人々」の教育戦略 ――グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店，272～284頁
- 苅谷剛彦，1991『学校・職業・選抜の社会学――高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会
- 苅谷剛彦，2001『階層化日本と教育危機――不平等再生産から意欲格差社会』有信堂高文社
- 児島明，2008「在日ブラジル人の若者の進路選択過程――学校からの離脱／就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1号，55～72頁
- 児島明，2010a「ニューカマー青年の移行に関する研究――在日ブラジル人青年の「自立」をめぐる物語を手がかりに」『鳥取大学地域学部地域教育学科地域学論集』6巻3号，283～297頁
- 児島明，2010b「国境を超える移動と進路形成――滞日経験をもつブラジル人の青年の生活史分析から」『鳥取大学地域学部地域教育学科地域学論集』7巻2号，253～283頁
- 小杉礼子編，2005『フリーターとニート』勁草書房
- 佐久間孝正，2006『外国人の子どもの不就学――異文化に開かれた教育とは』勁草書房
- 志水宏吉編，2008『高校を生きるニューカマー――大阪府立高校にみる教育支援』明石書店
- 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致ほか，2013『「往還する人々」の教育戦略 ――グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店
- 清水睦美，2006『ニューカマーの子どもたち――学校と家族の間の日常世界』勁草書房
- 杉山春，2008『移民環流――南米から帰ってくる日系人たち』新潮社
- 津谷典子，2006「わが国における家族形成のパターンと要因」『人口問題研究』62号第１・２号，１～19頁
- 趙衛国，2011「中国系ニューカマーの教育戦略と社会的ネットワーク――中華料理人の場合」『移民政策研究』Vol. 1，現代人文社，37～53頁
- 内閣府，2010『平成22年版男女共同参画白書 概要版』
- 能勢桂介，2012『地域の移民の社会的排除――抑圧委譲の再生産』立命館大学先端総合学術研究科博士論文
- 能勢桂介，2013「移民の若者の社会的排除――ステップファミリーの場合」『生存学Ｖｏｌ．6』生活書院，128～142頁
- 広崎純子，2007「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択――支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』80号，227～244頁
- 部落解放・人権研究所編，2005『排除される若者たち――フリーターと不平等の再生産』解放出版
- 宮島喬，2013「外国人の子どもにみる 三重の剥奪状態」『大原社会問題研究所雑誌』657号，３～18頁
- 宮本太郎，2009『生活保障――排除しない社会へ』岩波書店
- Fraser, N., 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "postsocialist" condition*, Routlege.（=2003, 仲正昌樹ほか訳『中断された正義――「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房）
- Illich, I., 1981, *Shadow Work,* Marion Boyars.（=1990，栗原彬ほか訳『シャドウ・ワーク――生活のあり方を問う』岩波書店）
- Penninx, Rinus & Martiniello, Marco, 2004, "Integration Processes and Policies: State of the Art and lessons," Penninx,Rinus & Kraal,Karen & Martiniello,Marco & Vertovec, Steven eds., *Citizenship in European Cities: Immigrants, Local Politics and Integration Policies*: Ashgate, 139-164.
- Portes, Alejandro & Rumbaut, Rubén G., 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation,* University of California Press.
- Singh S. P., Winsper C, Wolke D, Bryson A., 2014, School Mobility and Prospective Pathways to Psychotic-Like Symptoms in Early Adolescence: A Prospective Birth Cohort Study. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 53 (5), 518-527.
- Willis, Paul. E, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing Limited.（=1996，熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房

Process of Inclusion and Exclusion in the Youth of Nikkei-Brazilian:

In an Area with Moderate Concentration of Foreigners

NOSE Keisuke

Ritsumeikan University

Key Words: rate of high school students, Lehman Shock, exclusion

I am going to explore what kind of difficulties young Nikkei Brazilians have in their lifelong course, focusing on a viewpoint of immigrant's integration. In spite of the fact that this point is crucial for immigration policy, only a little examination has been done yet in this field. Before the Lehman Shock, the rate of Nikkei-Brazilian students who go into higher education was in the lowest level in the whole immigrants. However, the rate has been improved after the financial crisis. Why has this ratio been improved after the Lehman Shock and also how have these young people without high school qualification survived? To explore the questions, I had some interviews with about 20 young persons in X area with moderate concentration of foreigners in Nagano prefecture and analyzed their interviews, by combining immigrant studies with those on young people.

Reasons why young Nikkei-Brazilian people recently go into further education can be found not in the support given by the local community but in the effort of assimilation they have done and their transformations. Still, Nikkei Brazilians often experience financial obstacles when they think about obtaining further academic careers. Noticing that they are in lower social class and are excluded from host society, it is quite a challenge for young Nikkei Brazilians without high school qualification to escape from such unsecure labor market.